

デンマークにおけるパーリ語および仏教研究

フレッド・ミュラー・クリステンセン

(Frede Muller Kristensen)

(奈良康明訳)

本稿は昭和40年10月19日、クリステンセン博士が本学において講演された際の原稿の翻訳である。同博士は本文中にもある通り、デンマークの新進パーリ語学者で、現在は画期的な“批判的パーリ語辞典”の編集に専念している。

博士の原稿の中には言語の名や書名に関して、可成り特殊なものがいくつかある。〔 〕をもって示した部分は、それらの語に対する訳著の補註である。

ヨーロッパでは大体1750年頃からインド哲学の原典が知られていたが、およそ1850年頃までは、サンスクリットを理解はそう進んだものではなかった。その後ヨーロッパでは仏典より先に、まず、古典的サンスクリット劇、ヴェーダ、ウパニシャッドが知られるようになった。そして、1855年にデンマークのインド学者、ファウスベルが法句経の出版をするまでは仏教文学は正しく知られていなかったのである。

さてデンマークについてみるならば、何故パーリ語と南方上座仏教がインド学の一部となり、デンマークの初期のインド学者たちの関心を得てパーリ研究の伝統が芽生えたのであろうか。何故それが古典サンスクリット文学や、仏教梵語の作品ではなかったのか、という疑問があるものと思われる。実は彼等インド学者がパーリ語を主に研究したのは、デンマークに彼等が利用しうる歴大な、セイロン文字で書かれたパーリ語写本類があったという事実によるのである。ではいかにして、その発生の地よりはるかに彼方の小さな国であるデンマークに、パーリ語写本の大コレクションがもたらされたのであろうか。

この問題に答えるために、我々はデンマークのインド学者、ラスムス・ラスク (Rasmus Rask 1787-1832) を知らなければならない。学生の時から彼は言語学研究には多大の興味と非凡な才能を示した。(たとえば)、彼は教師からデンマーク語訳つきの古代アイスランド語のテキストを借用すると、それを研究して、その言語の語彙や語形を導き出し、アイスランド語の文法と辞書を作ったのである。1807年に大学で勉強を始めた時には、当時の誰でもがするように、神学を学ぶ予

定であったが、彼は言語的な研究に興味を引かれていったのであり、アイスランド語、フィンランド語、ラップランド語、グリーンランド語、スラヴ語等さらにインド語やペルシャ語まで研究した。1816年、彼はデンマーク国王の後援を得て、スウェーデン、フィンランド、ロシア、さらにペルシャ、インドへの長い旅に出発した。インドのボンベイでは彼はアヴェスタ〔古代イラン語の一〕やパフラヴィ語〔中期ペルシャ語〕を習い、マドラスではタミール語を勉強し、1821年11月にコロンボに到着した。彼はセイロンでパーリ語、セイロン語(Sinhalese)、ゼンド語〔古代イラン語の一〕等を研究し、1824年に出版されたクロー (B. Clough) のパーリ文法には匿名で寄稿している。セイロン滞在中、彼は貝多羅葉写本の大コレクションを得て、1822年コロンボを出航している。しかし船が難破して彼は書籍や金品を失ったが、生命とすべてのパーリ写本は幸運にも失うことはなかった。彼はデンマークへ帰る為にセイロンにさらに四ヶ月もの滞在を余儀なくされたが、その間にコロンボでデンマーク語により「セイロン文字書法」すなわちセイロン文字の入門書を出版している。(Sinhalesisk Skriptlore, Colombo, 1822年) 1823年、彼は貴重なパーリ写本のコレクションと共にコペンハーゲンへ帰った。長年にわたりインドの言語研究に没頭して多くの貴重な資料を持ち帰ったことから、彼はパーリ文法か、またはそれに類したものを出版するであろうと予想されていたが、その実、インド、セイロンより帰国後の最初の出版はスペイン語の文法書であった。彼は東洋への旅行後は非東洋的言語や一般言語学の研究に没頭していたのであり、その書簡の一つの中に「私はすべて東洋的なものは忌み嫌う」と書いている。これは彼が旅行中の病気、貧困、苦勞などから東洋研究に嫌気をさしたのであると考えられる。しかし彼はドラヴィダ語の研究の準備をし、また出版されはしなかったが、バーラアヴァターラ (Bālāvatāra) [13 C. 頃にかかれたパーリ文法の入門書] に基づく短いパーリ文法や、彼の死後(1862年)に出版されたイラン語インド語の概説などを書いている。これらのことはラスク自身、自らセイロンより持ち帰った貴重なパーリ・コレクションを活用しなかったということの意味しており、その先鞭を付けたのはデンマークのインド学者、ヴェスターガード (Nils Ludwig Westergaard 1815-1878) であった。

1848年、ヴェスターガードはラスムス・ラスクの死後は王室図書館に納められていたパーリ写本の目録を出版したが、しかし彼もこの目録以外にはパーリ写本についての仕事はしていない。

西洋におけるパーリと仏教の研究に関して最も重要なのは、ラスムス・ラスク

将来の写本について専心的に研究したデンマークのインド学者、ファウスベル (Viggo Fausboell 1821-1908) である。彼も大学で勉強を始めた時には神学を学ぶことになっていたが、ラスムス・ラスクの論文に大いに感激して言語学的研究を主要課目とし、アイスランド語やサンスクリット等を学んだ。当時のインド学の教授であったヴェスターガードは彼にパーリ写本について研究すようはげましたので、1848年以降、パーリ研究に没頭するようになり、ラスク将来写本に真剣にとりくんだのである。彼は文法に関するテキストから仕事を始めたが、すぐにジャータカ〔本生話〕の写本に関心をもつようになった。1855年彼は法句経 (Dhammapada) を出版したが、これはすべてローマ字体でなされたパーリ・テキストの最初の出版であり、法句経からの抜萃と、当時のヨーロッパでの学術語であったラテン語訳が含まれている。1861-1872年にわたり、彼は短いジャータカ・テキストを出版し、1877年から1896年の間にロンドンで6巻のジャータカの刊本を出版したが、これはガーター (gāthā 偈頌) と散文の物語り、および註釈の両方を含んでいる。さらに1881年には東方聖書 (Sacred Books of the East) の中に経集 (Suttanipāta) の英訳、1885年から1894年には語彙つきのスッタニパータの出版をなしている。1878年、彼はコペンハーゲン大学のインド学教授に任命された。長年にわたったジャータカ刊本の出版の仕事は彼の視力を減退させ、晩年にはほとんど盲目となってしまったのである。

ファウスベルが活躍したのと殆ど時を同じくして、コペンハーゲンに、もう一人のデンマークのインド学者、トレンクナー (Vilhelm Trenkner 1824-1891) がいた。彼は1841年に大学で言語学的研究を始め、古典言語学、ペルシャ語、アラビア語等、さらに近代言語をも研究し、ヴェスターガード教授指導のもとでサンスクリット、ゼンド語、パフラヴィ語を習った。彼はさらに独学でベンガル語、ヒンディー語、セイロン語、ビルマ語も勉強したのである。このように多くの言語を勉強したために彼は一つの言語、あるいは二つか三つの特定の言語研究に専念することが出来ず、かくて彼は学位も取得なかったし、大学や王立図書館で地位を得ることも出来なかった。彼は自分の資産があり、コペンハーゲンで孤児の学校の校長の地位についている。彼はしばらくインド学研究にたずさわっているうちにますますパーリ語に関心を持つようになった。ファウスベルはすでに自ら考案した特別な速記法を用いていくつかのパーリ・テキストを筆写していた。トレンクナーもこの方法によりコペンハーゲンにあるすべてのパーリ写本とロンドンにあるもののいくらかを筆写したのである。(例えば Abhidhānappadīpikā, Majjhi-

ma-nikāya, Suttanipāta, Dhammapada-aṭṭhakatā, Jātaka, Milindapañha)。

トレンクナーの筆写とは写本の単なる筆写、コピーではなく、批判的な意見、考察で満たされている。そして彼のパーリ・テキストの出版はそれに基づくものであり、1879年ロンドンより Milindapañha 第1章、翌年には同書の全部の校訂が完成、1888年にはロンドンより Majjhima-mikāya 第1章が出、2, 3巻は死後に出版された。トレンクナーは自分の筆写を大辞書編纂の資料にと考え、また文法用例も集めてパーリ語辞書と精細な文法書の出版を意図していたのであったが、ついに生前には実現することが出来なかった。この辞書編纂のために彼の収集した用語については、また後にふれる。

1903年、アンデルセン (Dines Andersen 1861-1940) はコペンハーゲン大学のインド学教授に任命された。彼は最初、古典言語学を学んだが、それ以外にも一般言語学や、ファウスベル教授の指導のもとにサンスクリットをも勉強した。数年間にわたって彼はサンスクリット文章論の研究に没頭しており、1889年には大学より金メダルを授与され、1892年に学位を得ている。次いでパーリ研究に従事するようになり、1819年には Rasavāhinī の一部を翻訳し、1897年にはファウスベルのジャータカ刊本の索引を作製した。1901年から1907年にわたり、彼の有名なパーリ語読本が、非常に有用な語彙とともに出版された。スウェーデンからの協力者、ヘルマー・スミス (Helmer Smith) と共に、彼は1913年には Suttanipāta を、そして1921年には Pali Dhāṭupāṭha [パーリ語動詞の語根を集めた作品] を校訂出版している。しかし、パーリ語学にとって最も重要な彼の貢献は、“批判的パーリ辞典” (Critical Pali Dictionary, 以下 CPD と略記) の仕事である (これについては後に改めて述べる)。1927年に教授の地位を退いてから後、彼は終生 CPD の仕事に専念していた。

アンデルセン教授の後任はポウル・トクセン (Poul Tuxen 1880-1955) であり、彼は主に古典インド哲学に関心をもっていたが、仏教研究にも貢献している。1928年、彼はデンマーク語で“ブツダ、彼の教説、伝統および生きている仏教”を出版した。彼は長らくタイ国に滞在して僧院に生活したこともあり、現に生きている仏教を研究してこの本を書いたのである。1936年には中観派や竜樹の仏教相対主義についての本を出版している (2nd ed., 1953)。さらに法句経のデンマーク語訳も出している。

トクセン教授の後継者は現在のインド学教授、ヘンドリクセン (Hans Hendriksen 1914-) である。以前、彼はパーリ語に非常な興味を示し、彼の博士論文は

パーリ語の文章論についてであった (Syntax on the Indefinite Verb Forms in Pali)。CPD の仕事にも何年か従事したが、現在ではインド学を教授するに必要なこと以上には、パーリ研究に特別な関心はなく、もっぱらインドの現代語、ヒマラヤ地方のパハーリー方言 (Paharī) の研究をしている。

以上、デンマークのインド学者とその重要な出版、特にパーリ・テキストの校訂について述べてきたが、こうした諸著作が、パーリ語及び南方上座仏教の研究に多大の貢献をしてきたことは論をまたない。しかしパーリ語に関するデンマークでの出版で、世界中のインド学者、仏教学者、言語学者によく知られているのは、デンマーク王立学士院によって出版される CPD であろう。そこで、この辞典編纂の歴史と現状について簡単に述べてみたい。すでにトレンクナーがパーリ写本の大部分の批判的筆写をしたことは前に述べたが、この筆写本をもとにして、彼はパーリ語辞書を出版するために名詞と動詞語根の二種類のカードを集めた。原写本からパーリ・テキストを筆写する場合、彼はファウスベルがこの目的のために考案した速記法を使っているが、その例を示せば次の通りである。

- 1 子音の後の単母音 a は省略する。

例 bl = bala

- 2 長母音、二重子音の例。

$\acute{a}, \acute{i}, \acute{u} = \bar{a} \bar{i}, \bar{u}$ etc; $\acute{k}, \acute{g} = kk, gg$ etc.

- 3 子音の氣息音は字体を少々変える。

$\acute{k}, k, g, g, c, c, j, j, d, d, p, p, b, b.$

例 $\acute{p}r = para$ $pl = phala$ $\acute{b}l = bala$

- 4 随音・ $m \cdot s = mamsa$

- 5 鼻音 / $ag = anga$ $gd. = ghandham$

- 6 絶対法の後尾、特殊記号、 $tvā : t\grave{v}$ $g-t\grave{v} = gantvā$

トレンクナーはこの方法をそのそのカードにまで広く使っている。しかし前述した如く、トレンクナーは彼の辞書の一部たりとも出版することは出来なかった。彼の集めた筆写やカードはすべて死後、大学図書館に納められた。そして当時司書であった、アンデルセンの管理するところとなった。アンデルセンはパーリ語とパーリ言語学を厳正な言語学的基礎の上に研究できるようにするために、CPD の必要性を痛感していた。そしてこのトレンクナー・コレクションにはげまされてこの計画を完成させるために努力することを決意したのである。

1912年、アテネでの東洋学者大会で国際的な規模でパーリ語の辞典を編纂することが決められたが、1914年の世界大戦の勃発はこの計画実現の障害となってしまった。そこでアンデルセンはスウェーデンから協力者としてヘルマー・スミスを招き、コペンハーゲンで独力でも辞典を出版しようと決意した。両者はトレンクナーの集めた材料が辞典の基礎となるべきことを確認し、つづいてこれをおぎなう仕事を開始した。アンデルセンはトレンクナーが集めた動詞語根をホイットニー (W. D. Whitney) の“サンスクリット語根” [The Roots, Verb-forms, and Primary Derivatives of the Sanskrit Language, Leipzig, 1885] に倣って再整理した。1924年には CPD の第1分冊が出版され、1948年には第1巻が完成した。この第1巻は主としてアンデルセンとスミスによって出版されたものであるが、前者は1940年に亡くなったので、第1巻の最後の分冊はスミスが現在のコペンハーゲン大学のインド学教授たる H. ヘンドリクセンの助力を得て出版している。第1巻の完成後、スミスは CPD の仕事より引退し、ヘンドリクセンが二人の弟子、パウリー夫人 (Mrs. Pauly) と私、すなわち、クリステンセンの助力を得て、今後の出版のための資料を準備したのである。1957年、ヘンドリクセン教授は CPD から引退したので、パウリー夫人と私の二人だけがこの仕事のために残されることとなった。比較文法を専攻しているヴァルンダール氏 (Mr Warundahl) が時に我々を助けてくれている。

さてアンデルセンとスミスが中心になってなされた第1巻の出版には25年の歳月を要している。従って、我々が残りの巻数——6乃至7巻の予定——すべての資料を準備して出版するには、少くとも200年にかかることになるであろう。かくて1958年に CPD デンマーク委員会とデンマークにおける協力者たちは国際的基盤の上にこの出版を継続することを決定した。我々は多くの外国の学者と連絡をとり、そのある人は有力な協力者となっている。この辞典の出版を推進するために我々はいろいろな方法を考えてみたのであるが、かかる大事業の組織を作り上げるのは容易なことではない。1963年、CPD 事業の再編成に関し、私は従来経験をもとに勧告するように要請され、次の二点を強調した。それは CPD すべての原稿はコペンハーゲンの編集局へ送られる前に、少くとも別の協力者の一人が改訂すべきであること、多くの国々に活動センターを出来るだけ早期に設立して独立に仕事を進めるべきであること、の二点である。すべての仕事、すなわち、参照事項の確認、原稿の改訂等、は各国のセンターでなされることになる。このセンターは次の諸国におかれることになっている。

ドイツ ここでは次の諸学者の活潑な協力が約束されている。コップ博士 (Dr. Kopp), アルスドルフ教授 (Prof. Alsdorf), ベツヒェルト (Bechert), ヒーブラー (Haebler), ブッドゥラス (Buddruss), また、オランダからのボレー博士 (Dr. Bollee) などである。

チェッコスロバキア ティスンブ博士 (Dr. Tisunp) と彼の弟子。

フランス カイラ夫人 (Madame Caillat) と M. テロル夫人 (Madame Martini Terrol) が多分1966年から常時協力者となることになっている。

日本 辻直四郎教授を委員長とする九人より成る国内監修委員会と三人の協力者、名古屋の前田恵学、京都の雲井昭善、桜部健各教授がいる。

セイロン、すでにゴダクムルラ博士 (Dr. godakumlura), ジャヤヴィクラマ教授 (Prof. Jayawickrama), ニワラブuddhi 教授 (Prof Niwalabuddhi) 等が尽力されている。昨年私がセイロンを訪れた際、CPD センターを公式に設立するために文部省、大学の代表者達と相談したが、まだ最終的解答は得ていない。

インド、昨年インドに滞在していた時 CPD センターの設立計画を大学と文部省の代表と話し合った。今回も日本からの帰途にはインドに立ち寄り、この計画の細部にわたる話し合いをする予定である。さらにアメリカも CPD センターを持つことに多大の関心を示している。

1960年以来第2巻の三分冊 ā から āyu の部分までが出版されたが、来年には次の一分冊が出版されることになっている。さらに1967年以降には毎年二分冊ずつ出版されることを希望している。多くの国々からの協力者を得てこの事業が伸展するに依じて出来るだけ仕事を統一あるものにするべく、協力者達に、CPD の項目を書く際の一般的指示をきめておく必要がある。私はこれに関する資料を集めており、1966年までには完成したいと願っている。そして第1巻と同じ線を維持するよう努めたい。

今後の編纂の基本原理は第1巻と同じであって、それは、集められ解釈される語はパーリ文学だけに限られることである。すなわち「部内的原典批判」(internal textual criticism) であり、パーリ文学を、他の言葉、例えば中国語やチベット語で伝承された仏教文学と比較することはしない。CPD はそのような比較研究への一つの手段であるべきである。CPD が扱べき第一の資料は第1巻と殆ど同じであって、聖典テキスト、註釈書類、古い歴史書や技術に関する文献などである。私はこの資料の中に古い *ṭikā* (註釈) も加えたいと思う。将来はむづかしい言葉や術語を説明するために、二次的資料として、一般の註釈文学も大

いに利用したいと思っている。トレンクナーの集録、アンデルセンの語根の集録、そしてアンデルセン・スミスの集録などの古い資料に加えるものとして、我々はガイガーの集めた資料、フランクの集録（これは韻文文学より語を集めたもの）を自由に利用しうるのであり、さらに索引などに基づく新しい集録が準備されつつある。

以上、デンマークのインド学者たちがなしてきたパーリ語および仏教研究の概要をお話ししてきたのであるが、これ以外に、専門家でない人たち、インド学者とは呼べない人たちの手になる仏教関係の出版がある。それらは大体、他の学者の著作や仏典の翻訳などに基づいて書かれたものであって、学術的な面から言えば二義的なものである。しかし、デンマークの人人の間に仏教の智識を広めたという点では重要な役割を果たしてきているのである。いずれもデンマーク語で書かれたものであり、そのいくつかをご紹介したい。

E. レーマン (Edward Lehman), “ブツダとその教説”, 1907, (3rd. ed., 1920). “仏教概要とその伝播”

H. ヘフディング (Harold Hoeffding), “宗教の哲学”, 1901. 本書は二章をさいて仏教にあてている。

W. グレンベック (Vilhelm Groenbeck), “ヨーロッパとインドの神秘主義者”^o 1章が仏教にあてられ、著者は仏教に深く傾倒している。

K. ジェレラップ (Karl Gjellerup) は仏教に関する現代の著作について、1906年より1907年にかけていくつかの論文を発表している。

F. メルビエ (F. Melbye), “ブツダの宗教”, 1926.

レベントロー (Chr. Reventlow), “ブツダは我々に人生の意義について何を教えたか”, 1943.

さらにデンマークには仏教に影響を受けた小説や詩もある。K. ジェレラップは1906年に、“巡礼増カーマニータ”を書き、1907年には“完成者の妻”という韻文劇を世に問うている。

レベントローは1921年に「盲目のうちに」、1924年には「煉獄からの便り」を書いている。さらにワルデマル・ロールダムは1925年に6幕物の劇「ブツダ 運命の寵児」を出している。

デンマークに於けるパーリ語や仏教に関する学術的著作も、また一般的著作もデンマーク人を仏教に改宗せしめるものではなかった。人々を改宗させるのは学

術的な仕事ではなく、それは伝導者の任務である。しかしながらこれらの著作がデンマークの大部分の人々に仏教の知識を与え、これによりデンマーク人が宗教的な面に於いてより寛容になるのに貢献して来たことはうたがいないところである。それと同時に、デンマーク人に、仏教が主要なる要素となっている文明をより正しく理解させて来たのである。

日本、国内監修委員会（The Japanese Supervisory Committee for the C. P. D.

ABC 順（敬称略）

足 利 惇
舟 橋 一 哉
干 潟 竜 祥
金 倉 円 照
水 野 弘 元
長 尾 雅 人
中 村 元
辻 直 四 郎（委員長）
山 口 益

協力者（Actual contributor or collaborators）.

雲 井 昭 善
桜 部 健
前 田 慧 学